

## 女子どもをそまつにする 民族は滅亡する

森田宗一

平塚らいちょうさんは、『女は原始太陽であった』というスローガンを掲げて女性解放運動を展開されました。しかし私は四十年近く子どもや家庭の問題を臨床家として扱って来て、痛感させられたことは、『女性（母性）は、原始も今も未来にわたっても太陽である、太陽でなくてはならない』ということ。「女・子ども」の問題などとこれを軽くそまつに扱う民族は滅亡する。その点で、残念ながら日本は先進国どころでなく、このままだとあまり地球に長居が出来ないのではないかと思っていました。

わが国では、「女・子ども」と並べて、それは何か価値がひくい軽い事柄のように考える傾向があります。古い家族制度時代だけでなく、日本国憲法三十年たった今日でも、あまり変っていない感があるのです。心理学や人間行動の学問の面でも、法律の領域でも、子どもや女性のことには生涯をかけ

るなどとは、本道でなくわき道へそれたこと、男子一生を賭けるに価しないことでもあるかのように思われがちではないでしょうか。（私などもそういう批評を受けて来たようです）あまりに大人や、男性本位の社会の構造と風潮だと思います。

過日も八ツ岳の麓で、私が会長をしている「カトリック正義と平和協議会」の夏期合宿があり、人権とか抑圧され粗末にされている人々のことが色々論じられ、今後どう対処していくか討議されました。いわゆる南北問題、抑圧された民族、政治的弾圧をうけている人々、国内においても、未解放部落の人、心身障害者、施設出身者、在日外国人、その他思想信条による被抑圧者などの問題です。ところが、会員の一人で国際的な視野で人権や平和に熱心にかかわっている女性がこんなことを語っておられました。「私は、うちの子どもたちからよく言われるんですよ。お母さんはひろい見地から抑圧されている人々のために働いているというのが、今世界で一番抑圧され、そまつにされているのは、日本の子どもではないか。そのためにまずやらなくては駄目だと思ふ」

全く同感だと思いました。まず罪なくして闇から闇に抹殺される胎児が年々二、三百万もある。生れおちても子どもら

しく生きるに耐えない状況がいたるところにある。"おとなになりたくない。どうすればいいか。食べ物は沢山あるし、ママが沢山たべるといふ。いやでも大きくなっちゃう。どうしたらいい。ああ確実な方法がある。集団自殺すればいい"。そんな会話が小学生の間でよくかわされると報告されています。子どもの自殺の増加は、心痛むばかりの今日この頃です。その他あげればきりがなくらい子どもや女性(母)の問題が、粗末に扱われています。悲しい心象風景が多いのです。

子どもには子どもの世界があり、侵すことのできない子どもの人権がある筈です。そして女性は母性です。子どもを生んだかどうかに必ずしもかわりなく、まさしく女性の問題は母性の問題です。そしてそれは子どもの不幸に直接大きくつながっているのです。「子どもは国の宝」だとか、「子どもは未来を背負う大切なものだ」、「青少年問題は喫緊の要務だ」などとよくいわれます。しかしその実、子どもがほんとうに大事に考えられ、若者が真に幸せなときはないのです。「子役をつかってあがりませしめる」というのが実態ではないか。つまり田舎芝居の一座がうまくいかなくると、『先代萩』でも、『寺小屋の場』でも、とにかく子役を出して観客を泣

かせる。入りはいい。そのあがり是一座の親方の方がせしめるわけです。それに似たことが、子どものこと、少年問題の領域に少なくないのです。政治行政においてもそうです。それはすぐ母性(女性)の問題にかかってくるのです。つまり「女・子ども」の問題は、スローガンにはされるけれど、実はいつも何かに利用され、片隅におかれ、あるいは、あがりはごっそりほかにせしめられてしまうのです。来年は国際的な「子どもの人権」についての児童年とされています。この辺で日本も本気で女・子どもの問題を考え実りあるものとしな

いと、パチが当り、日本民族の明日を誤ることになります。先頃「養護施設協議会」編で『泣くものか』という題の本が出版されました。そこには、高度経済成長という金もうけ一筋の戦後の政治の犠牲になった家庭と子どもの生々しい事実が、子どもの作文や詩でリアルに報告されています。編集者もこんなふうに書いています。「子供たちの体験は、戦争につぐ最大でもっとも残酷なものであった。この一〇年の激変する社会は、この子供たちを証人として、後世の歴史の上で裁かれなければならないであろう」味読すべき事柄だと思

います。  
(弁護士・元家裁判事)